

姫路市立図書館だより

城影



発行 姫路市立城内図書館
兵庫県姫路市本町68-258
電話 079-289-4884

2022年 2・3月合併号

春期館内整理のため休館します

3月9日（水曜日）から3月17日（木曜日）まで

姫路市内の全図書館は、蔵書点検のため休館いたします。期間中は「Myライブラリ」のパスワードを登録されている方のみ、図書館ホームページからの予約が可能です。電話でのご予約・お問い合わせはできません。
整理期間中の本の返却は、各館の返却ポストをご利用ください。
利用者の皆さまには、大変ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解くださいますようお願い申し上げます。

城内図書館に「児童バリアフリーコーナー」を作りました！

障害のある子供も図書館を利用しやすいように、館内に点在していた点字絵本やLLブック（やさしくよめるほん）、さわってあそべるふわふわえほんなどを集め、コーナー展示しました。
どうぞご利用ください。
大型絵本や紙芝居のある読み聞かせルームの横です。



2月・3月 図書館カレンダー（■が休館日）

2月 February 如月						
城内図書館						
日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28					

3月 March 如月						
城内図書館						
日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

不条理な世界

世の中には明るく健康で、順風満帆に過ごせている人もいます。しかし、社会的な格差が広がり何となく違和感を覚えたり、不全感を抱いたりする人もいます。そこで、古今東西の不条理を扱ったものを文学を中心に集めてみました。

『ヨブ記 旧約聖書』岩波書店（193-ヨ）：ヨブはもっとも敬虔で信心深い善良な人物です。が、次々と悲惨で不幸な目にあいます。正しい者に運命は必ずしも微笑んでくれるとは限らないのでしょうか？

『はじめての親鸞』五木寛之／著 新潮社（188-シ）：常識を揺さぶるような究極の逆説の言葉、「善人なほもつて往生をとぐ。いわんや悪人をや」（悪人正機説） 浄土真宗の開祖、親鸞のキケンで危ない入門書です。

『異邦人』カミュ／著 新潮社（953-カ）：新型コロナウイルスの感染拡大に伴って読まれている『ペスト』の作家の不条理小説です。「きょう、マンが死んだ」という鮮烈な書き出しで始まります。主人公のムルソーは衝動的な犯罪に対して、法廷で「太陽のせいだ」と不敵に述べます。

『変身』カフカ／著 新潮社（943-カ）：ザムザが朝目を覚ますと、自分が虫に変わっているのに気づきます。彼は家族のために日々働いていましたが、部屋から出られなくなり、逆に家族は生き生きと暮らし始めます……。

『ゴドーを待ちながら』サミュエル・ベケット／著 白水社（952-ベ）：ベケットの不条理劇。男二人がゴドーという人物を待っている。ゴドーとは誰で、どこに住んでいて、何をしているのか、誰も知らない。でも、二人はずっとゴドーを待っている。いろんな暇つぶし、時間つぶし、人生つぶしをしながら、ずっと待っている。翌日の同じ場所で同じ時間、二人はゴドーを待っている。

『お魚』金子みすゞの詩。『わたしと小鳥とすずと』所収 JULA出版局（911.5-カ）：「海の魚はかわいそう。（中略）けれども海のお魚は なんにも世話にならないし いたずら一つしないのに こうしてわたしに食べられる。」生きるためにはほかの生命を奪い食べなければなりません。

『古の武術に学ぶ無意識のちから』甲野善紀／著 前野隆司／著 ワニ・プラス（789-コ）：武術研究家の甲野善紀が「人の運命は決まっている。しかし同時に自由である」「矛盾を矛盾のまま矛盾なく取り扱う」ことを身体（古武術）を通して探究しつづけます。

『理不尽に勝つ』平尾誠二／著 PHP研究所（783-ヒ）：神戸製鋼などで活躍し“ミスターラグビー”と呼ばれた平尾誠二の著書です。「人間は生まれながらに理不尽を背負っている。親や兄弟を選ぶことはできないし、境遇も選べない。しかし、不確実なものや割り切れないものを受け入れ、そのなかにおもしろみと希望を見出す」ことの大切さを説いています。

もし、私たちが他の人との比較をしないで、矛盾や理不尽を受け入れることができれば、もっと自由や幸福を感じることができるでしょう。 (小島)

図書案内

『最後に「ありがとう」と言えたなら』

大森 あきこ/著 新潮社 (673-オ)

皆さんは納棺式をご存じですか？ ずいぶん前に「おくりびと」という映画が話題になりました。それで知ったという方もおられるかもしれません。

本書では、著者が納棺師として働くなかで、「死」と向き合い、遺族が故人と最後のお別れをすることの意義についての考えがつつられています。

納棺式では、納棺師が故人に化粧などをほどこし、生前の姿をできるだけ再現して棺に納めます。遺族は、故人にお気に入りの洋服を着せてあげたり、棺に思い出の品を納めたり、話しかけたりと時間をかけて、故人とお別れします。昨今、葬儀も昔とは違い簡素化の傾向が強まっています。生前から葬儀は必要ないと申し渡している方もいるようです。そんななか、納棺式を行う方は多数派ではないでしょう。しかし、いくつもの納棺式を執り行った著者は、故人との別れを行う儀式は、残された人がこの先を生きていくために必要なことだと考えます。

本書を読んで、いずれ来る大切な人との別れや、自身の終わりについてじっくりと考えてみてはいかがでしょうか。

(青田)

今月の子どもの本

『パラリンピックは世界をかえる』

ローリー・アレクサンダー/作 アラン・ドラモンド/絵

千葉 茂樹/訳 福音館書店 (78-ア)

第二次世界大戦時、「不治の病」とされていた脊髄損傷に画期的な治療法を提示して、致死率を大幅に下げることになった医師がいました。若きユダヤ人医師、グッドマンです。

グッドマンは、ドイツの田舎町でユダヤ人の両親のもとに生まれました。大学では医学を学び、やがて優秀な医師として認められていきます。ところがそんなグッドマンにヒトラーによるユダヤ人迫害の危機が忍び寄ります。間一髪でホロコーストから逃れたグッドマンは、イギリスに亡命します。

イギリスでグッドマンは、ストーク・マンデウィル病院に精神科の責任者として着任し、そこで死を待つだけだった患者に「目的のある生き方」という選択肢を与え、社会への復帰を促します。そして、彼らのリハビリに選んだのがスポーツだったのです。

病院の敷地内でわずか1種目、参加選手16人だけで始まった小さな競技会は、グッドマンの努力と愛情で社会に大きな影響を与えるパラリンピックという大会に成長したのです。

巻末には、実在のパラリンピック選手たちの物語もそえられています。

小学校5・6年生ぐらいから。

(坂根)